神宮の森はいかにできたか
樹木医　石井　誠治氏

卓話者紹介　　**高山　肇委員長**

今年は明治維新から 150 年、そして、2020 年に明治神宮は創建 100 年を迎えます。非常に大変タイミングの良いお話を頂けます。

石井様は、樹木医、森林インストラクター、環境カウンセラー、日本山岳会会員でいらっしゃいます。ＮＨＫ文化センター、朝日カルチャー、読売日本テレビ文化センター、川崎市民アカデミー等での人気講師。軽妙な語りの野外講座が好評。樹木診断調査、園芸相談、環境教育活動、ラジオテレビなどでも活躍中。得意分野は自然解説、樹木、草花、エコツアーガイドなど。著書に『都会の木の花図鑑』（八坂書房）、岩波ジュニア新書『樹木ハカセになろう』（岩波書店）、『大人の樹木学』（洋泉社）。ヤマケイ新書『木を知る・木に学ぶ』（山と渓谷社）新刊：くもん出版『わたしは樹木のお医者さん』と多数の書籍を出版されています。

明治神宮の森は「永遠の森」を目指した壮大な計画のもと、大正４年から造営工事が始まりました。疎林や原野だった場所に森を作るために必要な樹木は膨大な本数になります。創建に当たり全国から植樹する木を奉納したいという希望が高まり、北は樺太（サハリン）から、南は台湾、満州（中国東北部）朝鮮からも献木が届きました。その数全部で約１０万本。奉献された木を植える勤労奉仕の青年団延べ 11 万人に及びました。こうして大正９年１１月１日、６年の歳月をかけて森が誕生したのです。

境内のレイアウトが決まると骨格になる大きな樹木の植え込みが始まります。貨車に積まれた根巻きされた樹木は、原宿駅から人の手によって境内に運ばれ植えられます。参道には通年風よけになる常緑のクスノキやカシが植えこまれ、見えない森の中には主に落葉広葉樹が植えられました。

創建当初、明治神宮に何を植えたら立派に育つか、また、１００年後、自然の状態になっていくのか、当時の植物学者たちは考えました。代々木の地名は幹回り 10m を超えるモミの木が生えていたからです。マツ科のモミは尾根や乾燥した土壌を好みます。関東ローム層が深く地下水位も深い場所では、スギの生育が悪くなるため、本来の植生常緑広葉樹の森を目指す植え込みが考えられました。そのためシイやカシ、クスノキなどの常緑広葉樹が骨格になる森つくりを提唱したのです。

ところが、当時の内閣総理大臣であった大隈重信首相が「神宮の森を薮にするのか、薮はよろしくない、当然、杉林にするべきだ。」として、伊勢の神宮や日光東照宮の杉並木のような雄大で荘厳なものを望んでいました。しかし、本多清六博士を中心に、林苑関係者は断固として大隈重信の意見に反対し、谷間の水気が多いところでこそ杉は育つが、関東ローム層の代々木では不向きだと説明して、ようやく納得させたそうです。もしこの時に杉の森にしていたら、今のような素晴らしい森にはなっていなかったかもしれません。

明治神宮　大鳥居

閉会点鐘　　**牛島　聡会長**

創 立/1993 年 10 月 13 日(平成５年)
事務局/〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-2-2
ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾒｿﾞﾝ九段 906 号
Tel：03-3288-7300 Fax：03-3288-7400
E-mail：ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp
http://tokyo-orc.jp/

例会日 毎週水曜日　12:30～13:30
例会場 ホテルグランドパレス　Tel：03-3264-1111
会　長 牛島 聡　　幹　事 青木 隆幸
会　報 山下　秀一（委員長）山田　丈夫（副委員長 ）
土居岩生 木宮雅徳 小林大介 永井一史(委員)